

## ***M-GTA 研究会 Newsletter no. 3***

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：青木信雄、岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斎藤清二、佐川佳南枝、柴田弘子、林葉子、水戸美津子、木下康仁

### **第 25 回 研究会の報告**

【日時】 2004 年 3 月 6 日(土) 13：00～18：00

【場所】 立教大学(池袋キャンパス)5 号館 5209 教室

【参加者（敬称略）】

塚原陽子（桜美林大学）、林葉子（お茶の水女子大学）、水戸美津子（山梨県立看護大学）、筒口由美子（富山医科薬科大学）、津雲睦美（富山医科薬科大学）、滝原香（富山医科薬科大学）、宮坂友美（富山医科薬科大学）、小倉啓子（青梅慶友病院臨床心理室）、斎藤清二（富山大学）、佐瀬恵理子（東京大学）、荒井昭子（日本福祉大学）、岡田加奈子（千葉大学）、渡辺千枝子（山梨県立看護大学）、柴田弘子（産業医科大学）、吉村夕里（京都文教大学）、戒田信賢（京都大学）、林裕栄（埼玉県立大学短期大学部）、塚原節子（富山医科薬科大学）、廣川吏英子（富山医科薬科大学）、角田成美（富山医科薬科大学）、浅川康吉（群馬大学）、畠末憲子（埼玉県立大学）、松井由美（国際医療福祉大学）、埜崎健治（目白大学）、隅谷理子（大妻女子大学）、伍石紋子（お茶の水女子大学）、山井理恵（明星大学）、堀越敦子（日本女子大学）、藤田奈緒（佐賀大学）、嶋山淳子（佐賀大学）、納富史恵（佐賀大学）、山元恵子、荒井春生（武蔵野大学）、笹野京子（新潟県立看護大学）、金井幸子（新潟県立看護大学）、阿部正子（新潟県立看護大学）、鹿野裕美（宮城大学）、横山登志子（北海道医療大学）、山崎浩司（京都大学）、木下康仁（立教大学）、佐川佳南枝（西川病院）、の計 41 名

### **【世話人会報告】**

1. 事務局は今後一年間、引き続き木下研究室に置く。
2. 来年度は現世話人に加え、筒口先生に世話人に加わって頂く（筒口先生にはご快諾頂きました）。事務局は宮坂さんに加わって頂き、会費、名簿関係などを担当してもらう。
3. 次年度の公開研究会の日程について  
11 月 13 日⇒10 月 2 日にしてはどうか。
4. 総会にて規約を配布する。
5. 研究会の発表計画のため、また会員相互に研究テーマを把握するため、会員各自に現在の研究テーマ、進捗状況などをメーリングリストにて送ってもらう。（フォーマットなど佐川が用意する。今年度の研究計画書より簡易なものを予定している）
6. 来年度の総会議案については案をまとめ総会前、事前に世話人にチェックしてもらう

(佐川)。

#### 7. 会の活動全般について

- ・ 論文としての成果が今ひとつ。
- ・ 参加者の理解や感想が把握できていない。
- ・ 研究会の中で他の質的方法論についてなど講義的スタイルや査読経験の発表、外部の研究者によるM-GTAの理論的考察、ディスカッションなども取り入れる。

(文責 佐川)

### 【報告】

#### (前回発表者による経過報告)

要介護高齢者である夫を在宅介護する妻の介護役割受け入れプロセス

お茶の水女子大学 人間文化研究科 林 葉子

#### 1. 報告概要

- ・ 妻の介護役割受け入れプロセスは、夫に対する妻の夫婦関係調整プロセスになっていることに着目して分析し直した。
- ・ 今月中に投稿原稿にまとめ、学会雑誌に投稿する予定（現在のところ『家族社会学研究』に投稿予定）。

#### 2. 質疑応答

- ・ タイトルについて  
本研究のタイトルと結論とが違っているがそういう場合もあるのか  
→オリジナリティをどのように強調するかということで判断した。  
→タイトルは問いの形と答えの形で表すものがある。インパクトがはっきりする方法でタイトルをつける。ただし、問いの形の方が無難であり、修論の場合には問いの形のほうが受け入れられやすいだろう。(木下先生)
- ・ “介護役割受け入れへの状況的圧力”という概念について、医療者が主に状況的圧力という説明だったが、もっと詳しく教えてもらいたい。  
→状況的圧力の状況にはいろいろある。そのなかの一つが、医療者の在宅医療を推進する言葉があったという状況で、その比重が大きかったので、例示した。
- ・ 個別事例を考えたとき、全ての事例が分析の概要図のようなプロセスをとっているわけではないのではないのか（ゆらぎについて）。そこのところをどのように説明するのか。  
→プロセスは、行きつ戻りつして進むことや、順序が違う事例など多少あるが、立体的な関係でらせん状にプロセスが進んでいくことを説明した。

### 3. 3回の発表を終えての感想

木下先生をはじめ、M-GTAの皆様には、いろいろなご指摘をいただき、大変感謝しています。やっと、分析結果をだせるところまでにこぎつけたのは、ひとえに皆様のおかげと思っています。分析していると煮詰まってしまって、客観的に分析結果を再考することができなくなります。そういうときに、皆さんに討議していただくと、自分が気づかなかった側面も見えてきたり、ほかの発表の場（学会や投稿等）でもでそうな質問事項（自分では発表しきれなかった点や説明不足の点、あやふやだった点など）に対する応え方や修正の仕方を考えることができ、大変役に立ちました。また、研究会で発表するということは、期限を区切ることができて、研究の作業を促進することができると思いました。

皆さんも、研究会を大いに活用して、自分の研究を進めてください。こんなに親切に、親身になって助言してくださる会はないと思います。

これからも、よろしくお願いいたします。有難うございました。

~~~~~

### (第25回-第1報告) ～ペアセッション形式

都市サラリーマンにおける定年退職後の社会と自分とのかかわりの形成

ーグラウンデッドセオリーアプローチを用いたNPO組織への参加プロセスの分析ー

桜美林大学国際学研究科老年学専攻 塚原陽子

#### 1. 報告の要約

サラリーマンOBは定年を分岐点として社会や家庭における役割移行を経験する。定年は主に職業生活を基軸とした役割からの離脱を余儀なくするものであるため、充実した退職後の生活を送るためには、それに代わる社会とのかかわりを形成し、新しい役割を獲得していくことが求められる。

本研究の目的は、定年退職後の都市サラリーマンがNPO活動に関わる過程を明らかにすることによって、これから定年を迎えようという人に対して、職業から引退した後の新しい役割獲得に向けての1つの手がかりを提供しようというものである。それは同時に、定年退職する人たちだけでなく、退職者を受け入れる地域社会、中でも社会貢献の場を提供しようという行政やNPOの組織に対しても、退職者に対する働きかけのあり方について重要な示唆を提供するものとなる。

#### 2. 質疑の要約

(1) 対象先がNPOと限定されている理由はなにか

- ・方法論的限定により、NPOで活動することを選択した退職者に限定した
- ・NPOで活動することを選んだことは、対象者らにとって重要な選択であったはず、選択理由をはっきりさせる。NPOの中でも対象先が限定されるので、その特色を背景としていることを踏まえ、解釈の位置づけをする。

(2) 何が変化していくプロセスを明らかにしたのか

- ・ NPO の特性を背景にして、そこに対象者がどう関わっているかなどを関連付けもつとまとまりを持たせる。
- ・ 対象者らの現在の状態像がこれまでの経験の積み重ねであることと、はじめに明らかにしようとしたプロセスとが混乱している
- ・ NPO とのかかわり方は、退職前にすでに対象者らに築かれているということと GTA で見ようとするプロセスは無関係。

(3) 概念図、カテゴリーが分類になっている

- ・ 概念同士の関係性が捉えられておらず、概念図にダイナミックな動きがかけられている
- ・ カテゴリーがパターン分けになっている
- ・ 「なぜ」という問いを行き着くところまで出し続けること。思考の意識化をするために、問いを自分に向けることにより論理が明確になる
- ・ 疑問を出し尽くさないと、何をどうしたらいいかが徹底されない

#### (第 25 回－第 1 報告スーパーバイザー役から)

塚原さんの研究の分析テーマは「定年退職後の社会と自分とのかかわりの形成プロセス」というものでしたが、「社会と自分」というテーマが大きすぎ、実際には特定の NPO とのかかわりのプロセスの分析であったため、なぜ NPO に限定するのか、またここではなぜこの特定の NPO に限定したのか、という理論的理由を明確にし、解釈していく必要があったということが中心に議論されたと思います。結果の概念図が分類的であるということも指摘されました。また、どのようなプロセスが明らかになったのかをストーリーラインとして簡潔に明示することも必要であると思われます。(佐川佳南枝)

~~~~~

#### (第 25 回－第 2 報告)

ハンセン病治癒後、隔離政策廃止後も、なぜ定着村に居住し続けるのか？

—韓国定着村居住者の社会・家族・自己の相互作用（発病～現在）—

東京大学大学院 医学系研究科 国際地域保健学教室 佐瀬 恵理子

報告内容要旨：第一回発表へのご教示を受けて再検討した 4 点

1. 博士論文の焦点（在日韓国・朝鮮人入所者は、ハンセン病治癒後および隔離政策廃止後も、なぜ日本のハンセン病療養所に入所し続けるのか）と本発表内容の位置づけ。
2. 研究参加者（①在日療養所入所者、②韓国療養所入所者、③同定着村居住者）の関係。
3. 分析テーマ（表題）の検討。
4. ストーリーライン：「ハンセン病診断」を受け、社会から疎外される「家族に迷惑を掛けたくない」と考える。同時に、患者本人も社会や家族から疎外され「心の壁」をつくる。ハンセン病治癒・隔離政策廃止により、(元) 患者は一般社会に住む選択肢を得

る。しかし、一度「札がついた」患者は、それ以降も社会や家族による疎外を受ける。また、「悪化する後遺症」などで「家族に迷惑を掛けたくない」ため、ハンセン病元患者が集まる定着村に入居し、隔離政策廃止 40 年後の現在も生活し続けている。

(「」はコア概念名、医療文化人類学(疾病・病気・病い)の分類を援用し分析した)。

#### 質疑応答内容

##### 1. 医療文化人類学の分類(疾病、病気、病い)

- ① M-GTA でこのような分類援用は妥当か検討すべき。
- ② 分類の意義はあると考えるが、データ密着型分析になっていない。

##### 2. 韓国定着村の位置づけ

- ① 定着村の特徴を明らかにすれば、比較対象としての定着村が明確になる。
- ② 定着村居住者の個人の思い、社会的背景の検討が必要。

##### 3. 分析テーマ・分析結果

- ① 分析テーマは、「理由」ではなく存在の根幹に関わる「意味」を問うべき。
- ② M-GTA でなくては発見できない、新たな知見を提示すべき。
- ③ 概念「定着村入居」のヴァリエーションが多い。さらに概念に分類できる。
- ④ Ultra Micro Level)に焦点を当てれば M-GTA になるのでは。
- ⑤ まだ時系列にこだわっている。
- ⑥ 分析焦点者に照らして意味づけを定義し、概念名を検討すべき。
- ⑦ 研究者のこだわりが分析に反映されていない。問題意識を前面に出すべき。
- ⑧ 精神障害者と比較すれば、ハンセン病患者の特徴が浮上するのではないか。

#### 所感と今後の計画

不足点を誘導しつつ質疑して下さり感謝している。分析テーマを再度練り直し、ハンセン病(元)患者が定着村入居を選択した Ultra Micro Level (Body, Mind, Emotions) における葛藤や意味づけを中心に再検討する。韓国ハンセン病患者の定着村の特徴を明確にすると同時に、ほかの疾患(精神障害者等)との比較も検討する。

#### **(第 25 回－第 2 報告司会者から)**

##### 佐瀬さんの発表について

今回が第 2 回目の発表ということで、前回の発表での問題点を改善する形での発表がすすめられました。私自身前回の内容はニューズレターで拝見していましたが、十分に佐瀬さんの研究を理解した上での司会ではなかったため、佐瀬さんが希望していた検討内容を深められたのか、気にかかっています。

##### その他気づいたこと

修士論文構想の方々の発表から、研究計画を丁寧に作り上げていくことの重要性を再確認させていただきました。Research Question は何なのか、自分の論理に矛盾がないのかなどを確認して発表する必要があると思いました。

また、研究のキーワードとなる言葉については、ある程度概念等を把握して発表する必要があるのではないのでしょうか。この研究会はさまざまな専門分野の方々の集まりなので、その分野の中だけで通用する言葉などもあり、また、その言葉に対してそれぞれの捉え方も違うと思われます。

翻って考えてみると、この研究会にこられるさまざまな分野の方々からの理解が得られれば、かなりの専門分野でも通用するということになります。そういうことから考えると、一部の人が発言するのではなく、全員が何らかの形で意見を交換できればと思います。今回は、時間配分が十分ではなく、全員のご意見を伺うことができませんでした。お詫び申し上げます。(松井由美)

~~~~~

#### (第 25 回－構想発表－第 1 報告)

在宅ターミナルケアにおいて訪問看護師が困難を克服するプロセス

富山医科薬科大学大学院成人看護学（慢性期）講座 滝原 香

<報告の要約>

テーマ：在宅ターミナルケアにおいて訪問看護師が困難を克服するプロセス

研究内容：在宅で亡くなられた患者を援助した訪問看護師の経験談を通して、訪問看護師の困難を克服するプロセスを明らかにし、今後ますます訪問看護師が在宅ホスピスケアに関われるようになること。

①A 県内の訪問看護ステーションで働く訪問看護師に、在宅での終末期患者との関わりについてアンケート調査を行う。(A 県内の実態調査を行う)

②在宅で亡くなられた患者と関わったことのある訪問看護師（在宅死を援助する過程で感じたことなど）にインタビューし、訪問看護師の困難を克服するプロセスを明らかにする。そのとき木下(1999、2003)の提示する修正版グラウンデッド・セオリー法を用いる。

<質疑の要約>

- ・ アンケート、または M-GTA かどちらかにしたほうがよい。
- ・ 何を困難としているか、明確にしたほうがよい。
- ・ ターミナルケア、ホスピスケア、終末期ケアの違いを整理しておくといよい。
- ・ 対象をもう少し明確にしたほうがよい。患者と関わった時期、患者の疾患などによって、結果が異なってくるのではないかな。
- ・ 質問項目を再検討するべきである。

#### (第 25 回－構想発表－第 2 報告)

「看護師へのコンサルテーション活動が機能するプロセスを明らかにする」

富山医科薬科大学大学院成人看護学（慢性期）専攻 宮坂友美

発表要旨：

看護において「コンサルテーション」という言葉が本格的に使われ出したのは、1996年に専門看護師が認定されてからである。その後約8年が経過しているが、「コンサルテーション」の実際については、専門看護師自身の経験が紹介されている文献はいくつかあるが、その実態を研究した文献はほとんどない。

そこで、看護師へのコンサルテーションを行っている専門看護師らにインタビューし、コンサルテーション活動が機能するプロセスを明らかにしたいと考えた。

質疑：

- ・コンサルテーションという言葉は看護界で普及しているのか、どのように位置づけられているのか
- ・相談＝コンサルテーションなのか、カウンセリング、スーパービジョン、などとコンサルテーションとの違いは？
- ・看護師だけにコンサルテーションは必要なのか
- ・ソーシャルワークとの関連もあるのではないのか
- ・グループマネジメントとしての捉え方もあるのではないのか、個人を対象とするのか、グループを対象とするのかでも違うのではないのか、など

以上のように、まだ自分の中でも全くまとまっていない状態での発表、質疑応答となりましたことをお詫びいたします。そのような状態にもかかわらず、貴重なご意見、ご質問をいただきまして本当にありがとうございました。

今回の発表では、テーマへの示唆はもとより、研究の難しさ、厳しさの一端に触れる機会をいただいたと感じております。皆様のご助言を今後に活かし、一層努力していきたいと思っております。発表させていただきまして本当にありがとうございました。

**(第25回－構想発表－第3報告)**

嫁の介護意識の変容に関する研究

山梨県立看護大学大学院 渡辺千枝子

1. 要旨

介護保険の導入、介護意識、少子高齢社会をはじめとする社会的背景の変化により、介護事情も変わってきている。しかし、世論調査等により、半数以上の人々が家族に負担をかけずに在宅での生活を望んでいると予測された。そこで、在宅介護におけるキーパーソンになると考えられる嫁を対象に、介護意識の変容をテーマに研究を行なおうと考えた。

Research question

嫁は介護負担が大きいにもかかわらず、なぜ介護を継続しているのだろうか、また、在宅介護を継続している嫁の意識は変化しているのだろうか

## 2. 質疑

Q: この研究における新しい知見は何か。介護者を嫁と限定する必要性はあるのか。

A: 介護の継続における負担感とともに肯定的な感情が存在することは、中谷氏らの研究ですでに指摘されている。しかし、続柄によってその介護意識の変容、肯定的感情の質が異なると考えられる。また、対象を嫁にしたのは、介護者と被介護者間に内在する感情が、他の家族と異なると考えられたから（調査から、4人に1人は関係がうまくいかないと回答する等）

## Advice

介護者の嫁と被介護者に焦点を当てる意義はあると考えられるが、非常にデリケートな面をふくむため、インタビューに質の高さが要求されるであろう。半構成的面接を行なうということであるが、ある程度の構成的な面接内容も考えてその上で面接を行わなければ表面的な内容に終わる危険性が高い。

## 3. 感想

ご指摘いただいたことは核心に触れられ、自分としても納得のいくものでした。また、木下先生が言われていた「問い」の厳しさに、改めて自分の研究を見直す機会を頂いたと思い、大変感謝しております。研究会を通して、皆様のご指摘を全て理解し、吸収できたらと思いました。

.....

## 【次回の研究会】

日時 2004年5月29日(土)13:00~18:00

場所 立教大学(池袋キャンパス) 総会も併せて行ないます。

教室は後日お知らせします。

## 【その他のインフォメーション：会員からの近況報告など】

- ・ 会員への参考情報やご自身の近況などをお寄せください。
- ・ 新年度に所属変更等のある方も事務局（佐川）に連絡をお願いします。

## 【編集後記】

- ・ 今回は木下先生ご出張のため、佐川が代理で編集しました。発行が遅れましたことをお詫びします。
- ・ 今回の研究会は参加者41人と過去最多を記録しました（多分）。また初参加の方が約半数を占め、研究会も新たな段階に入ったことを実感しています。
- ・ 今回からはスーパーバイザーとのペアセッション形式や研究構想発表も取り入れました。これらについてのご感想などもお知らせください。
- ・ 確実に論文化を進めるために、積極的に発表の場を活用して下さい。発表を希望される方は佐川までご連絡下さい。

(佐川佳南枝)